
神様、始めました。

レオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様、始めました。

【Nコード】

N7907R

【作者名】

レオ

【あらすじ】

ニートになってまだ一週間の俺は、オンラインゲームの課金のため、コンビニへ向かっていた。途中、何かと頭をぶつけてしまったのだが、それは神様だった！！

プロログ◆神様、始めました。

「うわ。またこいつにやられた……………」

俺はパソコンに表示されたリターンをクリックする。

このオンラインゲームのボス、強すぎ。

仕方ねえ、課金しに行くか。

時計を見ると、10時。

俺は1000円を持って家を出る。

「うわ、眩し……………」

太陽光が俺を襲う。

だが俺は負けない。

コンビニまで走る。

家からコンビニまでの距離は約1キロ。

あと少しでコンビニ……………という所で、何かにぶつかる。

「っでー!!」

頭を強く打った。

目眩がする……………

目をつぶり、頭を抱える。

頭の痛みが治まり、ゆっくりと目を開けてみた。

視界には俺の身体。

俺は仰向けに倒れていて、俺はそれを見下ろしていた。

まさか、幽体離脱!?

よっしゃー!

よっしゃーじゃねえ!!

とりあえず、元の体に戻らないと……………

俺は自分の身体に触れ……………

あれ……………

今気付いたけど、幽体離脱してる俺の服装、変じゃね?

なんか白っぽい服。

まるで天使見たいな……………!!

まさか、このまま天界行き！？

待て待て待て。

元の体からは血すら出てないぞ。

衝撃が強すぎたって言うのか？

どういう………

すると、俺の物だった瞼が開く。

何開いてんだ！！

閉じろ、急速に！！

何、別の魂が宿っちゃったの？

困惑する頭。

俺の体は立ち上がる。

そして――

「いててて………まさか人間にぶつかってしまおうとは。」

俺の体は勝手に口を開く。

そして、俺を見る。

「んん！！？私だと？私が何故私の目の前にいるんだ、私の頭がどうかしたっていうのか！！よく見たら、私の体がまるで人間のような。」

なんかめっちゃ喋る…………

「はっ！！悟ったぞ！さては貴様、人間だな！」

「まあ……………」

「落ち着いて聞け。私と貴様の魂は、ぶつかった時に入れ代わってしまったようだあぐああ何故こんな事があるああ！！」

お前が落ち着けよ。

「人間。一応、名を聞いておこう。」

「俺は佐藤^{さいとう}隼哉^{しゅんや}。森山高校の1年だ。ニートを始めて一週間。」

「私はゼウス。神だ。」

え…………

ええええええええ！！！！

俺、神と交代したのか！

そりゃあ、神と人間の魂が交換なんかしたら、落ち着く訳ないよな。

「私は今、神々の頂点に君臨している、全知全能の神である。人間の魂を操る事など容易だ。」

凄いな。

「貴様が私と貴様の魂を交換すれば、それで解決するのだ。」

成る程……

「さあ、私と貴様の魂を交換するのだ!」

「いくぜ!! って出来るかあ!!」

神、ゼウスは驚愕とした表情をする。

「な、何故だ……」

「いや、やり方とか知らないし……」

ゼウスは落胆する。

「馬鹿な……この私が、人間の姿のまま、生きて行かなければいけないだと……いや、まだ希望はある! 人間、耳を貸せ。」



小さな羽のある天使達が、楽しく話す。

地は地にあらず、ふかふかの雲。

噴水から出る水は澄んでおり、虹が空を飾っている。

「ここが……天界。」

ゼウスが言うには、

「私にも住む所がある。天界の中心部にあるゼウス神殿だ。そこに私の直属の部下である、天使ミカエルがいる。ミカエルに魂の入れ換えをどうやってやるか聞くのだ。勿論、忘れた感じでな。ちなみに、天界へは、行きたい、と思うだけで行ける。」

らしい。

そこら辺の天使に、神殿の場所を聞くか。

噴水の近くで会話をする二人の女の天使を発見。

「あー」

俺が近付いた途端、二人は口を大きく開け、目を丸くする。

そして、悲鳴を上げ、噴水から離れるように走る。

噴水からある程度離れた所で、二人は土下座の体制になる。

「すみませんでした!!」

…………へ?

「ゼウス様が此処にいる時点でこの場所はゼウス様の物です!なのにゼウス様がいる事も気付かず私達は堂々と噴水の近くで話していました!申し訳ありません!!」

ゼウス…………

今まで何をしてきたんだ…………

まずはこの二人をどうにかしなければ。

「ああ、大丈夫。楽にしていよ。噴水は皆の物だからね。」

「あ、ありがとうございます!!」

よし。

「ところで、ゼウス神殿って何処だったかな。」

「え?ゼウス様は、思念で行けるんじゃない…………」

そうなの!?

「あ、ありがと。」

目を閉じる。

ゼウス神殿に行きたい！

目の前には既にゼウス神殿。

確か……ミカエルだっけ。

ゼウス神殿に……居るよね。

まあ、神殿に入ればわかるか。

こうして俺の神様ライフが始まった。

第1話◆神Ⅱ万能。

俺、隼哉君は今、神が住んでいたと言われる神殿の前に立っている。

そして俺は今、神の体となっている。

何故かって？

神と頭をぶつけて魂が入れ代わって神様が俺の体になって能力使えなくなっただけに代わりに神の体になった俺が魂の入れ換えを学んで元に戻す事になってその方法はミカエルとか言う奴が知っててミカエルがこの神殿に居るからなのだ。

神殿の入口に足を踏み入れる。

途端、前方に炎渦。

「何だ!？」

呆然としてみると、取り巻いていた炎は弾け、消える。

中にいたのは、四枚の翼を生やし、白衣を着た、男。

「お戻りですか、ゼウス様。」

ミカエル……………なのか？

ミカエルかどうか確かめる方法は無いのか？

呼び掛けるか。

もしここでミカエルならば、名前を呼び掛ければ返事をするだろう。

だが、ミカエルで無かったら？

変な反応をされ、怪しまれる。

ミカエルは何処にいる？とか聞いてみるか。

しかし、こいつがミカエルだったらどうする。

……………

一か八かで呼び掛ける！

「ミ、ミカエル。」

俺が呼び掛けると、白衣の男はこちらを睨む。

一瞬の沈黙。

男はため息をついてから、近付いてきた。

「俺はミカエルだ。だが、貴様はゼウス様では無いな。何者だ。」

ば、ばれた……………

何故ばれた!?

「貴様……………人間か？」

人間って所まで突き止められたよ。

素直に「そうです。」と言った方が良いのか？

ミカエルの顔怖いよ、なんかすげー睨んでるよ。

どうすれば!?

「貴様の情報を俺に教えろ。」

「え、え、えっと、森山高校1年の佐藤 隼哉で、です。」

めっちゃ詰まった……………

ミカエルは、俺が言い終わると、目を閉じる。

ミカエルの体が炎に包まれ、炎が無くなる時にはミカエルもいなかった。



……

しかし、何をしようか……

このまま奴を待つのも暇だ、この体で色々としてみるのも面白い。
とりあえずこいつの家にも行ってみるか。

……

行けない。

人間は思念では行けないのか。

使えん身体だ。

……しかし、こいつの家は何処だ？

と、考えていると、視界に炎渦が見える。

「…………ミカエル。」

炎渦の中心には、ミカエルがいた。

「ゼウス様。」

「ミカエル、何故此処にいるのだ。」

「貴方様の魂を、この人間の魂と交換するのです。」

「私のシナリオと違うような……まあいい。私と人間の魂を交換しろ。」

「はい。」

ミカエルは、心を落ち着かせる。

右手を私に向け……

「待て。人間がいなきゃ意味無いだろ。あとこの人間の家は何処だ。」

「す、すみません……今から連れてきます。こいつの家はコンビニと反対方向へずっと進んで突き当たった家。」

ミカエルは、急ぐ様子で消えた。

よし、こいつの家にも行くか。



ミカエル遅いな。

てか、ゼウスにミカエルから魂の入れ換え方法を聞けとか言われた
気が。

……俺、思うんだが。

俺の体、今ゼウスじゃん。

俺、全知全能じゃん。

全知全能じゃないけど。

つまり、俺が断れば、魂の入れ換えは出来ない。

………ん？

待てよ。

魂の入れ換えする必要性が無くね！？

俺、ニートだし。

今、神だし。

天が俺に生まれ変わるチャンスを与えたのか！！

生まれる訳じゃ無いけどね。

そんな葛藤に切り込むように、ミカエルが現れる。

「おい、人間。」

「その呼び方、止めてくんない？俺は名前があるんですよ、ミカエル君。」

「黙れ人間。」

な……………

「貴様のような下等な者を名前で呼ぶ事など有り得ん。」

言わせておけば……………

「おい天使！！俺は今、全知全能なんだぜ。そんな風に嘗めてると、ぶっ飛ばしちまうぜ。ぜっ、てマジ何だよおもれー」

「て、天使だと……………図に乗るな人間。」

「どうした天使。」

俺が鼻で笑うと、ミカエルは拳を握り絞める。

「くっ……………何の知識も無い人間風情が！！」

ミカエルは、身の回りに炎を創りだし、それを俺に飛ばす。

「う……………」

俺は目を細め、頭を腕で覆い隠す。

炎は、俺に触れる直前、俺を避けるように消えた。

「ゼウス様を取り巻くオーラか……………くそっ」

ミカエルは、神殿の床を蹴る。

俺は悟った。

「……………なあミカエル。魂を入れ換える方法、教えてくれるよな。」

ミカエルは、小さく舌打ちした。



これが、あの人間の家。

一軒家で、二階建て。

ドアは現代風。

ポケットをまさぐると、右の方から鍵が出てきた。

「これか……………?」

家の扉の鍵穴に差し込む。

回す。

鍵を抜き、ドアノブを捻る。

少し時間を置いてから、思い切り引く。

「開いたか。」

靴を脱ぎ、リビングへ向かう。

人の居る気配がしない。

親は……………仕事か。

二階に上がる。

二階のとある個室。

暗い部屋。

一つのパソコンが光っている。

「モンスターバトルオンライン?」

なんとも在り来りな名のオンラインゲームだ。

しかし、今私ができる事はこれくらい。

仕方ない、やってみるか。



「魂の入れ換え方法は教えてやったぞ。さあ、ゼウス様と魂を交換しに行け。」

「嫌だ。」

「な…に……?」

神の体をそう簡単に返してたまるか。

とりあえず思念でさっきの公園でも行くか。

ミカエルの視界から突如、消える隼哉。

「く、奴め……」

第2話◆ミカエルは。

ふー。

逃げ切ったか……………？

とりあえず近くの建物に逃げ込もう。

今はゼウスだから、大丈夫でしょ。

適当に歩いていると、なんか大きい修道院みたいな建物を発見した。

ゼウス神殿程ではないが。

つかゼウス神殿とかネーミングセンスねえな。

自分の名前を自分の住む建物につけるって。

それは置いといて、この修道院に匿ってもらうように頼まなければ。

修道院の入口に立つ。

……………

あれ、どうすんの。

インターフォンとか無いもんなー。

うーん…………

扉の前でしばらく考えていると、翼を持った白衣の少女が走ってくる。

翼と白衣は限定！？

そんな事より、今は神なんだから隠れなきゃ。

近くの物陰に隠れる。

少女は修道院の扉の前で止まる。

一体どうするんだ。

すると少女は、普通に押して開けた。

……………そうだよね。

でもこれは住んでる人とかの特権であって、俺があれをやるのは駄目だよね。

でも神だし許されるかな。

よし、勇気を出して、不法侵入だ！

扉を押す。

扉の先には白いテーブル。

そこには、男の天使と、さっきの少女がいた。

「え…………ゼウス様？」

「いや、私達は別に、仕事をしてない訳じゃなくて、少し休んでい
るというか…………」

「いや、怒ったりしないから。」

とりあえず近くの椅子に座った。

少女がコップを口に近付ける。

「何飲んでんの？」

「え、私が作った新作のミルクティーです。飲みますか？」

「ああ。」

少女は、持ったコップを差し出す。

見た目は普通のミルクティーだ。

天界で作られる飲み物か。

一体、どんな味なんだ…………

まずは一口、飲む。

.....

.....

美味っ!!

普通にミルクティー。

だが、何だか軽い。

味の濃さとかではない。

口に入れた時の質感が、軽いのだ。

ふわっとして.....

「めっちゃ美味い。」

「本当ですか!?! ねえ、ラファエルも飲む?」

「いや、いいから。何回飲ませれば気が済むんだよ。ミルクティー
今日だけで何回飲んだと思ってんだよ。何回新作に付き合わされると
思ってたんだよ。」

少女は残念そうに息を吐いた。

「そっか.....じゃあ次は、紅茶に挑戦する!」

「そういう問題じゃないだろ。俺の腹を考えてくれ、ガブリエル。」

「えーっ」

よし、名前ゲット。

ラファエルも大変なんだね。

つか、こんな可愛い子をガブリエルって名前にしたの誰だ！！

ラファエルが不意に話し掛ける。

「ところでゼウス様、今日は何故こんなにも優しいので？」

変な所を突かれた！

どうする……………

「最近是天界の治安も落ち着いてきたし、気が楽になったんじゃないの。」

ナイスフォローだ、ガブリエル！！

「でも、今日は神々による議会があるんじゃない。」

ラファエル、それはおいしいのかな。

「ついにサボりを覚えたんですね！」

ガブリエル、何か勘違いをしているぞ。

てか何故喜ぶ。

仕方ない、サボった事にしよう。

「まあ、サボったというか………」

「そうなんですか!？」

「それは流石に駄目ですよ、行った方がいんじゃないですか、何しろ議会なんですから。」

ラファエルが焦っている。

突然、後方の扉が開いた。

ガブリエルが驚く。

振り返ってみれば、ミカエルがいた。

「ゼウス様………何をやっているんですか。」

どうしたミカエル!

表情が危ない、と思っていたら、いきなり俺の腕を掴み、建物の外へ連れ出した。

「どうしたのだ、ミカエルよ。」

「まさか、我等の家に逃げ込んでいたとは。」

え…………

「まさか、お前この修道院みたいな所が家なのか？」

「そうだ。」

ミカエルは腕を組む。

「あと少しで議会が始まる。魂を交換するには時間が必要だ。今から魂を交換すれば、ゼウス様は議会に間に合うだろう。だが、貴様は魂を交換する気が無い。そこで、議会には貴様が出席してもらおう。因みに議会とは神々による話し合いのようなものだ。議会に出席したくなければ、魂の交換をしろ。」

「別に出席してもいいけど。」

「なっ！！？……………」

そんな脅しは効かんよ、ミカエル君。

「仕方ない……………貴様には議会に出席してもらおう。」

「なあミカエル。」

「……………何だ。」

「俺の事を貴様と呼ぶな。」

「人間とは呼んでいないからいいだろうが。」

「俺はミカエルって呼んでんだから名前で呼べ。」

「……………」

どうしたミカエル。

「……………」

何を躊躇っているんだ。

さあ言ってみたまえ！

「さっきお前がいた建物は、セラフィメウス熾使住処セという建物だ。」

かわされた！？

「熾使住処セには、天使の中でも最も位の高い、四大天使と呼ばれる天使が住んでいる。俺も四大天使の一人だ。」

自分自身で位が最も高いとか言うなよ。

ってまさか……………

「ガブリエルとラファエルも？」

「ああ……………つか何故知っている。」

「なんかね。ところで、俺の事は名前で「あ、議会の事をすっかり忘れていた。早く思念しなければ。貴様も思念で議会へ行け。」

そういつて、ミカエルは姿を消した。

俺も行くか。

目を閉じる。

………議会へ！！

まあいいや。

所でミカエルは何処へ？

辺りを見回していると、小さな女の子が小走りでこちらへ向かってくる。

少女が城の扉の前に駆けてきたので、しゃがんで少女の肩を掴む。

「おちびちゃん、此処は子供の来る所じゃないんだ。」

「え、なんのこと？」

少女は首を傾げる。

視界には、ミカエルの姿が前方に小さく映っていた。

「あ、アテナ様！！」

ミカエルはそう言った。

アテナ……………？

ミカエルの視界に入るのは大方、俺と少女。

名前に様が付くという事は……………

まさか、神！？

神だとも言うのか！

ばば、馬鹿な……こんなに愛くるしいロリ属性が、神だとお!!!?

嘘だろ……

「へんなぜうすだね。」

アテナは扉を開け、城に入っていた。

アテナ……

一体、どれくらい強いんだ。

強いとかいう問題じゃないか。

アテナの姿が見えなくなった所で、ミカエルが俺の胸倉を掴む。

おお………

「貴様、まさかアテナ様を知らないのか。」

「まあ。」

胸倉を掴む力が強くなる。

「知らねえのかあ!!」

「知るわっきやねえんだあよお!!!!」

「……」

ミカエルは俺を突き飛ばすように手を離し、小さな溜め息をつく。

「教える他ねーな。」

「ん、何を。」

「今回、出席する神々についてだ。知ってないと色々困るだろ。」

「ああ。教えろ。」

「まず、さっきのアテナ様。他に、ポセイドン様とアレス様とセレ
ーネ様とリプス様が出席する。わかったか。」

「わかった……………」

正直わかんね。

アテナとポセイドンとアレスとセ……………まあいい。

とにかく神が出席すんだろ。

「この中でも、アレス様は戦神と呼ばれる強さを誇っている。」

「へえ。やば。」

「ポセイドン様は海洋神で、水を操る事が出来る。」

「ふーん。」

「リップス様は、風神アネモイの下位に属す神で、南西の風を操る。」

「あねもいって？」

「風の神の事だ。」

「ふーむふむ。」

確かアレスとポセイドンとリップスと……………まあいい。

「性別は？」

「アレス様とポセイドン様が男性、アテナ様とリップス様とセレーネ様が女性の格をしている。」

「理解できない程に理解した。」

情報はこれ位でいいや。

「よし、行くぞミカエル。」

「もういいのか？」

「ああ。」

「まったく……………議会なんだからしつかりしてくれないと困る。」

俺は出来るだけ堂々とした感じで扉を開けた。

眩しい光……………

その先には、大きいテーブルと神々。

強そうな男………なんかポセイドンっぽい。

美しい女性………名前からしてセレーネだな。

やる気の無さそうな女………リップスしか選択肢が無い。

そしてさっきのアテナ。

テーブルの奥には、いかにも偉い神が座る椅子があった。

すげえ………

あれだよね。

神々の頂点だもんね。

横の隣接している席とかミカエル用でしかないだろ。

その席に向かいながら、他の神を横目で見る。

………異変は無い。

俺は偉い椅子に座った。

突然、激しい衝撃音が聞こえたかと思えば、扉が外れ、壊されている。

扉の近くの煙の中に、人影。

「……………よお。」

途端に神々の視線が集中する。

強そうな男が言った名前には、聞き覚えがあった。

「アレス、遅いぞ。」

黒い外衣を羽織り、ズボンのポケットに手を突っ込んでいるアレスは、微笑。

「黙れポセイドン。てめえが1番に此処に來た訳じゃねえだろ。」

アレスの言い放った言葉に、ポセイドンの拳が強く握られる。

が、それは自制心によって収まる。

「……………まあいい。座れ。」

アレスが雑に座り、議会は落ち着きを取り戻した。

「って何を落ち着いているんだー!!」

俺の一声が、議会一帯に響き渡る。

「扉壊すとか突っ込む奴の1人や2人いてもいいじゃねえか!!」

俺の叫びに対し、最初に応えたのは、アテナだった。

「いつものことだよ。そうだよね、せれーね。」

アテナの隣にいる美しい女性、セレーネは、嫌悪の表情。

「困ったものです。」

「ちっ………」

アレスは頬杖を突き、何も無い所に視線を向ける。

「なあ………ミカエル。どうすりゃいいの。」

「えっと、確かゼウス様が人間について話し合うとか言っていました。」

人間ね。

「では、これより………」

全ての視線が俺を取り巻く。

どうしよう。

何とか議会とかあるよね多分。

何やら議会的な何かが。

第何回みたいな。

そういうのって付き物なんだよね。

知らねーし。

「これより議会を始めます。」

異変は無い。

よし、この調子で行くぞ。

「えー今回の議会では、えー人間の事について話し合いましょう。」

「人間？何故人間の事を話し合う。理由を聞こうか。」

ポセイドンの威圧が半端ない。

「……最近、人間が増えすぎかな？」

「一理あるな。」

お、ポセイドンを納得させたぜ。

「では、人間を減らすのですか。」

セレーネが優しい口調で尋ねる。

「……ああ。そうなるな。」

「そうですか。では一体どんな人間を？」

どんな人間を減らそうかな。

俺がじっくり考えようとしていると、机に両足を乗せ、アレスがこんな事を言った。

「ニートとかを消せば、いんじゃないの。」

な………

「何を言うか！ニートだって仕事に就ける可能性が0な訳じゃない！！」

ミカエルに肘で押される。

「お前必死過ぎだろ。」

その一言で、ミカエルは周りの神に睨まれる事になった。

ポセイドンが立ち上がる。

「ミカエル、ゼウスの事を何と言った。」

「え、何でしたか………」

「お前と呼んでいたであろう。」

「そうでしたか？あはは、すいません………」

そうか、成る程。

ミカエル以外は俺が人間って事を知らないから、神々の前ではミカエルはゼウス様と呼ばなくちゃいけないのか。

俺はミカエルの肩を叩いて話す。

「ゼウス様、と呼ばなくてはな。」

「くっ……………」

俺は大きく息を吸う。

「では気を取り直して。減らす人間の種類は、犯罪者だ。」

皆様、どうですか。

良い案でしょ!?

「何故犯罪者を？」

良い質問ですねー、セレーネさん。

「それは……………まあ、何と無くです。」

ポセイドンがテーブルを叩き、咆哮する。

「ふざけるなあ!!!!!!何と無くだと?真面目にやれええええ!!!!!!」

刹那。

音を置いていく速さで、神々が動いた。

俺は、1人固まっていた。

ポセイドンが両手を挙げると同時に、空中にどんな物質よりも硬い水が発生。

水は槍になり、槍はどんどん増殖する。

うわあ、神が怒ったよ。

これが神の怒りなのか……怖っ。

「議会など粉々にしてやるわ!!!!」

水の槍の一つがテーブルに放たれる。

爆裂波のような衝撃と共に、粉々に碎けるテーブル。

アレスが気だるそうに呟く。

「っせえな。耳障りなんだよ。」

ポセイドンの眼球だけが、真っ直ぐにアレスの方へ向くと、発生させた水の槍を全てアレスへ射出した。

「……………んだあ？マジになりやがって。水が火に優勢だとしてもなあ、てめえの水なんかじゃあ、俺の火には勝てねえんだよ!!!!」

轟音と共に現れた炎で、水の槍は沸騰し、消滅する。

「「うおおらあああ!!」」

炎と水がぶつかる。

激しく蒸気が踊る議会場の状況は、悪化するばかりだった。

醜い争いと、うっとうしい蒸気の熱気は、リプスの癪に障るのには十分な条件だった。

「いい加減にしてくださる？蒸し暑いのは嫌いなんですの……………」

リプスを中心として展開された烈風のフィールドは、蒸気を簡単に掻き消し、間合いが無いに近かったポセイドンとアレスの距離を、吹き飛ばすという形で離れさせた。

アレスの舌打ち。

「てめえ……………風神^{アネモイ}下位の分際で、俺に影響与えてんじゃねえよ。」

いや理不尽だろ。

アレスが、両手から太陽を越す熱量の球体を生み出した。

議会場内に、瞬間の沈黙が突き抜けた。

(まさか…………アポロンに並んだとも言うのですか……………?)

セレーネの勘繰り。

セレーネは、膝にアテナを乗せ、月の防護球体の中で観戦していた。

「あてなはたたかういみがわからない。」

「私もです。元気があるのは良い事ですけどね。」

アテナがじっと戦いを見つめた。

視界が段々、三次元格子線上に確立されていく。

「えつくす、さんじゅうよん。わい、にじゅうに。ぜつと、きゅうじゅうきゅう。あれすはきゅうたいをぼせいどんのさんじげんざひようじようになげこむ」

先が見えるのだろうか……今アテナが言った座標上に、的確にアレスが炎獄球体を射出した。

何でポセイドン!?

リップスはどうした、何故ポセイドンに八つ当たりをするんだ。

不意を撃たれたポセイドンは、間一髪で水の防護壁を展開しそれを防いだ、速度を緩めただけであり、防護壁は突き破られた。

ポセイドンは速度の落ちた炎獄球体を避ける。

球体が向かう先には、俺がいた。

ちよっ、死ぬ!!

火炎の球体は、俺の身体に触れる事無く、粉々に砕け散った。

俺、強っ。

「ちっ、ゼウスか。これじゃあ勝ち目がねえ。」

アレスが苦い顔。

しかし、笑っているようにも見える。

「え、俺？ いや別に参加しないからね。」

突然、アレスとポセイドン、そしてリプスが集まる。

「ゼウスが参加してくりゃ、個人でいったって勝ち目はねえ。」

「一旦、協力してゼウスを倒しましょ。」

「同感だ。」

状況も理解出来ぬまま、ただ呆然と立っていると、四方八方から風の刃や火炎の弾、水の槍が飛び交い、それらが全てゼウスの周りで跡形も無く砕け散る。

「うわ！！わーっ、うおおお？ おお……………」

何が何だかわからない。

「原初神アイテルの加護、全天物質^{エーテル}か。俺らじゃ破んのは難しいな。てめえら、本気出せ。」

ポセイドンは、嫌な顔をしながらも、水の凝縮度を上昇させる。

リプスを取り巻く風も、龍の形に変わる。

「これって、止めた方が良いよね……………?」

セレーネに聞いてみた。

笑顔で返された。

よし、頑張るぞ!!

俺がやる気を出した矢先、アテナがこんな事を言った。

「ぜうすにできるの?」

てめえに言われたくねんだよ幼児体型が。

可愛いからって調子乗ってんじゃねーぞ!!

不意に、辺りに雷が走る。

雷鳴が響くと、アレス達の動きが止まる。

「電撃だど?俺は大丈夫だとして、ポセイドンや雑魚リプスが耐えられるのか?」

アレスがそう言った瞬間、視界が光に満ちた。

第4話◆ごちゃごちゃ言うな。

光が視界から退いて、景色が見えるようになった俺は、その光景を見た瞬間、今まで意味不明の出来事が蓄積されてきた記憶にさらに加圧されたような感覚がして、脳内で混乱と驚愕が犇めき合いながら、硬直していた。

すぐさっきの部屋の姿は最早無く、テーブルや椅子と思われる物は見当たらず、ただ何もない殺風景な部屋だった。

アテナはセレーネと共に防護球体の中にいるため、被害は無い。

問題は、アレス達………なのだが、確実に生きているだろう。

何故なら、前方で煌めく炎が渦巻いているからだ。

煌炎が一気に周りに分散し、舞い上がるように消える。

中心には、片膝をつき、しゃがんだ状態のアレス。

その後ろには、ポセイドンとリプスがいた。

アレスが早歩きで俺に近付き、後ろを指差しながら目の前でこう言い放った。

「俺がいなかったら、こいつら消えてるぞ。」

え、そうなの？

でも、こいつら神なんじゃ……

「てめえは神人中で1番強えんだよ。こんな事あんまり言いたくねえが……手加減しろ。」

そうだった、俺ゼウスだった。

「これで消えたらどうすんだよ。」

「すまん……」

なんか勢いで謝ってしまった。

ブルーな気持ちだ。

「てめえ馬鹿か。少しは他の奴の事も考えろ。」

アレスに言われた……………

「良かったな、てめえの天使が無事で。」

ミカエルが居たであろう場所ををチラリと見る。

ミカエルは口から黒い煙を吐いて気絶していた。

[illegible]

つと、そんな場合じゃ無い、ミカエルを助けなければ。

ミカエルの傍によって、頬をぺしぺしと叩いた。

「おーい、ミカエル君。生きてるかー」

「……………」

返事がない、ただの屍のようだ。

……………って。

うわあああああああああ！！！！

ミカエルが殉職した！？ いやでもミカエルの職責って何……………

そんな事を暢気に言っている場合ではない。

でも、この短期間にも、色々あったよな。

いきなり人間って見抜いたり、建物の名前を覚えてくれたり、神について教えてくれたり、調子乗っていきなり炎をぶつけてきたり、調子乗っていろいろ命令してきたり、調子乗って人間連呼してきたり、……………なんか思い出あるよ、意外にも。

そんな事を暢気に言っている場合ではない。

「そんな事って何だ。あとと思ひ出に調子乗ってる所を使用するな。つか調子になんて乗ってねえだろ。乗ってんのは寧ろお前だ……………ゲホッ」

ん、今ミカエルの咳が聞こえ……まさか!!

恐る恐るミカエルを見る。

「な、何で咳しか聞こえてないんだ……こんなに苦しいのにも関わらず色々喋ってやったのに……聞かなくても良い所だけ聞いてんじやねえよ……」

おお………

瞼こそ開けないものの、ミカエルは喋れるようになったようだ。

………仕方ない。

俺が瞼を開けてやろう!

「痛たた……ぐあ痛っ! ちょ、瞼引っ張るな、うわ睫毛抜ける、っで指の爪が目、ああそこ瞼の裏だろめっちゃ痛過ぎ、自分で開けるわ!! ゲホッゴホッ、」

「五月蠅い黙れ。」

「………」

ミカエルは依然苦しそうに咳込みながら、うつすらと目を開け、ゼウスを力なく睨んだ。

「い、生きてた!」

「な、何今知ったぜみたいな反応してんだ……私を誰だと思って……」

言いかけて、首が後ろに折れる。

うわ。そういう演技は求めてないよ……どうせ天使とか死ぬような感じじゃ無いんでしょ。

いやでも、神でも危ないんだから天使なんか……

「ミカエルウウウ!!」

と悲しんだような感じを醸し出してみる。

不意に、肩を叩かれる。

後ろには、セレーネ。

「つていつの間に!?!」

セレーネは、無言でミカエルの額を触る。

「アスクレピオスに頼むしかない様ですね。」

アスクレピオス?

ミカエルが俺の心を読んだのか、不意にこんな事を呟く。

「あの医神か……確かに医の神なら簡単に治療出来るが……」

医の神………医神。」

成る程、びっくりする程気が利くなミカエル。

ナイス読心術。

って喋れんのかよ!!

「私が神に治療してもらって良いのでしょうか。」

「勿論よ。さ、早くゼウスと行きなさい。」

ミカエルは何故か、簡単に立ち上がる。

「何で立てるんだ?………特技は演技ですか。」

「セレーネ様の御蔭だ。早くアスクレピオス様の所へ行こう。」

へー、セレーネって意外に凄いなだね、何したんだろう。

ま、とりあえず思念で行こうか。

目を眩ると、また肩を叩かれる。

誰だろうか………

「何か?」

「少し、ね。」

この柔らかい声は……………多分セレーネだ。

セレーネは、唇を俺の耳に近付け、小声で囁く。

「貴方、ゼウスでは無いわね……………」

なっ!!?」

「議会が偶然あのメンバーだったから気付かれなかっただけで、他の者達には簡単に露見するでしょう。あまり不自然な行動は控えるように。」

確かに、ゼウスがミカエルとコントみたいな事する訳無いか。

ん、待てよ……………」

「セレーネ、何故俺の事をばらさないんだ?」

一応、セレーネに聞こえる位の小さな声で言ったのだが、返事は返って来なかった。

「ミカエルはもう行ってしまったけれど、貴方は行かないの。」

そう言われ、目を開くとそこは白い家の前。

「あら、ココドコ?」

「アスクレピオス様の家だよ。」

「成る程。流石は物知りなミカエル。」

まあ、これは至って普通な一軒家で。

特に驚くポイント無し。

「てか、ミカエルもう治ってね？ 別に見て貰わなくても良いじゃん。」

「いや、これは一時的な応急治療であって、あと数分もすれば体内にある時差炸裂電撃が俺を襲う。」

何ですかそれ。

「もう一回。」

「時差炸裂電撃。一度体内に入り込んで、時間差で炸裂する電撃。ゼウス様だけが使える技で、何の恨みかそれを議会で使いやがった奴がいる。」

「……………すいません。」

まあ、アスクレピオスなら治せるんでしょ。

俺は一軒家の前に立った。

「……………インターフォンが無い。まあ予想済みだったけどね。」

ミカエルが俺の前に出て、玄関の扉を叩く。

扉が開くと、中から変なおっさんが。

おっさんが……

おっさん!?

第5話◆思念が使えないⅡ神生終了。

アスクレピオスの家から出てきたのは、おっさんだった。

誰だよ。

「ミカエルさん……」

「ハスデヤか。」

ハスデヤ!?

何そのヤスデみたいな名前、考案者出て来いよ。

え、アスクレピオスは?

という思いはミカエルも同様だった。

「ハスデヤ。アスクレピオス様はどうした。」

「今は出掛けておりますが、あと少ししたら帰って来ます。」

「そうか………」

ミカエルは頭を抱える。

「どうした。」

ミカエルの肩を叩くと、怒りと悲しみが混ざって残念な顔が振り向いた。

「どうすればいいんだ！アスクレピオスに会えないじゃないか！！」

「何で？」

「何処に行ったか分からないからだ……………」

「思念で行けば良いじゃん。」

「はぁ……………」

何をそんなに落ち込んでいるのさ。

「俺は思念が使えない。」

……………え。

マジでそんな事言ってるのか？

「だとしたらお前……………糞滓雑魚じゃん。」

「はぁあ！！？くそかすぎこって……………貴様神の力を使いこなせるからって図に乗ってんじゃねえぞそもそもゼウス様の力を借りてるだけだろうがたわけが貴様等ゼウス様の体で無ければ指1本で燃やせるわ馬鹿め！！……………ハア、ハア、」

ミカエルの必死さを見た俺は、左手を口に添え、軽く笑いながらこ

う言ってあげた。

「息切れしてるよ。」

「黙れえ!!」

しかし……なら何故、ミカエルは議会に移動したり出来たんだ？

思念が使えない、となると残りの選択肢は……

固定型の場所移動!!

「その通り。」

「勝手に心を読むな!」

「だが移動出来るのは、ゼウス様の傍らと重要な場所の近くだけだ。」

成る程ね。

ゼウスの傍ら……

「俺が移動してミカエルが移動すれば「前は出来たのだが今は魂が受け付けないようだ。」

んだこいつ。

じゃあ俺が行くしかないな。

つと、その前に。

「時差炸裂電撃について教えてくれ。」

「えっと、電流は普通、体に流れた後、そのまま流れ出す。でも、ゼウス様はそれを自分の意思で相手の体内に留まらせる事が出来る。そして留まる電流は相手の生命力を吸収し、幾分後に相手の体内で爆裂する。」

「最悪な技だな。相手の生命力吸い取って、弱らせた挙げ句、電撃で止めを刺すとか……………出来るだけ早めに連れて来れたら連れて来るよ。」

「もっと必死になれ！」

おっしや行くぞ。

思念……………！！

目を開けると、床一面が赤い水で満たされていた。

うわああああ！！！！

おおっと、ついつい血に見えてしまったぜ。

それよりも、アスクレピオスは何処にいるんだ？

と、辺りを見回すと、なんかめっちゃ天使が横たわっていた。

皆、とても苦しそうだ。

さっきから背中に感触があるんだが、何だ？

振り向くの怖いな。

だが振り向くしかなかったので仕方なく振り向くと、ちっちゃな男の子が手を合わせ、固まっている。

どういう状況なの。

とりあえず、男の子に自分が見えるように、パシャパシャと水の音を立てながら目の前に回り込み、睨み顔で仁王立ち。

……って、目え閉じてんじゃねーかあ！！

「おい！！」

「……………」

「やいやいやい、無視してんじゃねーぞチビ。こっちは時間が無えんだ、反応しろや！」

「……………何。」

まさか目前でゼウスが仁王立ちしてるとは思わんだろうな。

「アスクレピオス……………って、知ってる？」

「わざとらしい言い方だね、ゼウス。」

その返答からしてまさか、いやそんなのある訳が………ば、馬鹿な
！！

アスクレピオスだとも言いたいのか俺の脳。

俺は右手の人差し指と中指を眉間に乗せ、深く息を吐いた。

アスクレピオスかどうか確かめる方法は、無いのだろうか。

呼び掛ける、という手もあるのだが………

もしここでアスクレピオスならば、名前を呼び掛ければ返事をする
だろう。

だが、アスクレピオスで無かったら？

てかデジャヴしてんじやんかよ、勝手にしてんじやねーよ俺の脳。

まあ前回も御本人だったし、今回も大方、アスクレピオスだろう。

だってゼウスって言ったもん、語尾に付属すべき漢字が無かったも
ん。

「どうせアスクレピオスだろ。」

「どうせって何。」

「アスクレピオス、頼みがある。」

「今は無理です。」

「なっ……………何で？」

怒りを抑えた俺って凄く偉いね、うん。

「どうせ誰かを助けてくれたの何だのでしょ。でも今忙しいし。」

「んだとおおおぅ！！わざわざ頼んでんのにその態度は何だああ！大体お前、さっきから全然動いて無いじゃねーか！」

するとアスクレピオスは、少し間を開けた後、鼻で笑った。

うわああああああ、今直ぐに殴り掛かりてえ！

時間が無いって言ってんじゃねえか！

「てか、周り見て分かんないの？沢山の天使が出血多量で苦しんでるんだよ。」

ああ、やはり床を浸す赤い水は、血か。

「今からこの子達を助けるんだよ。」

「……………どの位の時間で治せるんだ。」

「数分。」

もっと魔法みたいにパッと出来ないの？

何を治療したんだこのハゲ、と言いたい所だが、周りの天使は元気に起き上がっていて、アスクレピオスはハゲじゃないので言うのはやめた。

「……………で、何なの？」

アスクレピオスは若干怖い顔でこっちを見てくる。

なんか謝った方がいいのかな……………

「え、えっとーそのう、うちのミカエルがですね、非常に「ありがとうございます」です！アスクレピオス様！！」

「あ、あのーミカエルっていう「ありがとうございます！」

天使の感謝の言葉が邪魔で用件が言えねえじゃねえか！

「時差炸裂電撃の帯電状態って言う、危険な状況で「ありがとうございます」
ざいます！！！！」

……………天使うるせええええええええええ！！！！

人が話してるのに、大声で感謝の言葉言うなあああ！！ほら！！
アスクレピオスだって嫌がっ……………て……………。

「ありがと、ああ、ありがとー」

俺は思わず血に染まった床を爪先で蹴った。

アスクレピオス、てめえ手とか振ってんじゃねえぞ!!

「ねえ、アスクレピオス君？」

「ん。なに、ゼウス。」

こ、こっち向いてくれない？

何正反対の方向を向いて適当に返事してんだ!!

ぐあああ! 時間が無ええええ!!

「頼む!!! 1分だけでいい!!! だからちょっと着いてきてくれえ」

勢いで頭下げちゃった……

アスクレピオスは口をあんどりと開け、しばらくした後、こっちを向いてニヤリと笑った。

嫌な笑顔だ。

「しょうがないなあ。」

「じゃ、じゃあ、」

「見てあげても良いんだけどー、まあ? それなりの態度があるよね。そういうのを見せて貰わなきゃね。」

「なっ……………」

「いやー、土下座だよ、ど、げ、ざ。」

嫌な奴だああああ!!

アスクレピオスってそんな奴だったのか!?

もっとクールで優しいかと思ってたけど……………こいつただの餓鬼だ
ああああ!!

限界だ、俺の右手が限界だ!

「なーんてね、冗談にきむわふああだだだだだだだだだだ」

俺の右手はアスクレピオスのこめかみを勝手に捕えていて、アスク
レピオスの足は地面から浮いていた。



「行くぞアスクレピオス!! お前にはミカエルを助けて貰おう。」

「はい……………」

いやあ、気分が良いね、とても。

「所で、ミカエルは何処にいるの。」

「んなの関係無いだろ。思念で行くんだから。」

「いや思念使えません。」

「……………は？えっと、良く聞き取れなかった。はい、もう一回。」

「いやあ、俺思念できない……………よ?。」

俺はあんぐりと口をあけて、アスクレピオスをじつくりと見た。

慌てるんじゃない、頭の中で整理するんだ俺。

思念が使えない〓歩き

歩き〓時間が掛かる

時間が掛かる〓間に合わない

間に合わない〓ミカエル死亡

ミカエル死亡〓目的達成の失敗十何かしら不便十セレーネに申し訳ない

目的達成の失敗十何かしら不便十セレーネに申し訳ない!! 神生終了

ぐわああああああああ

ああああああああああ!!!!

思念が使えないなんて最悪の状況、考えてもみなかったなあ。

だって神って皆、思念使えるんじゃないの。

ミカエル………………………ぶあいぶあ
い!!

僕のせいじゃないよ？

アスクレピオスが思念できないって言うんだもん、しょうがないよ、
僕は悪くないんだ、だから恨んだりしないでね？

……………はあ、最悪の状況だ。

膝を落とす俺に対して、必要に呼び掛けるアスクレピオス。

何だよ、話し掛けんじゃないやねえ、俺は今絶望しているんだ……………

「ゼウス、場所教えてゼウス。」

「……………お前ん家。」

「固定型場所移動が出来るよ。」

「…………ほう。行くか。行こうか。行けるじゃんか……………行くぞおおおおお！！！」

希望の光と共に、いざ思念ッ！！！！

そして真っ先に映ったのは、仰向けで大の字になっているミカエルであった。

「遅い……………遅いよおおお！！！」

ミカエルは必死の形相でゼウスに呼びかけている。

「何故、思念して行って思念して戻って来るだけなのに、こんなにも時間が掛かるううう！！わざとか？わざとなのか！？」

「実はですね……………」

頭上には、美しい青空が広がっていた。



「という訳です……………どうですか、草原さん。」

ミカエルは、眉間に皺を寄せる。

「何だ草原さんって。雑草の一本すら生えてないぞ。解り難いボケすんな。まあ、突っ込みたい所は色々あるが、1番は……………固定型場所移動が出来るのを知った瞬間、切り返し速いなお前！！ってどーでもいいから治療してくれ。生命力吸い取られて死ぬ。」

「さすが！！良いねえ〜ツツコミが上手だね。」

そんな会話等、気にしないアスクレピオスは、ミカエルを真剣な眼差しで見る。

そして、こう言い放った。

「この電流は、取り除けない。」

第6話◆医神のやる気。

「ええっと……………今なんと？」

「この電流の除去は不可能だ。生命活動を続ける上での核となるものに密接に絡まって帯電していて、電流を取ることは死を意味する。」

「は？じゃあ、君を連れてきた意味って……………」

「ゼウスが放電するのが悪いんでしょ！！」

「さーせん。」

アスクレピオスは続ける。

「ゼウスの時差炸裂電撃、ここまでとは。電流の『種』のような物が核に寄生して、生命エネルギーを電力に変換し種内に蓄積。そして吸収できるエネルギーがなくなると超高圧の電撃が炸裂し、被寄生者を死に至らしめる。取り除いた瞬間『種』は吸収できるエネルギーが消えたと認知して、電撃が誘導型で核に炸裂するように出来ている。」

「よくそこまですぐにわかったね！えらいぞアスクレピオス！！」

と言った瞬間、ミカエルが俺に鋭い視線を向けた。

「おい、もっと真面目に事を考えろよ!!」

俺は真剣な眼差しでミカエルを見た。

が、何故かそれは長くは続かなかった。

「そこをどうにかするのが医神たる君の役目でしょ、アスクレピオス。取る策はあるんだろ？まあ無いとか言ったら君にもこの電流を流すけど。」

アスクレピオスは不気味に笑って、

「流石、ゼウス。脅し方が上手いよ。伊達に神の頂点に座ってないね。」

「嫌味な奴だな。」

そんなクールな俺を置いて、アスクレピオスは懷から蛇の絡みついた杖を取り出した。

「コレは、死者をも生き返らせることの出来る、俺の能力の凝縮体だ。」

「やっぱチートアイテム持ってんじゃ〜ん。」

「だが、四大天使となると、並みの精霊や魔族、人間とは生命力の強さが違う。核への生命力の供給として最適なのは『魔法陣』を書くことだ」

アスクレピオスはミカエルを囲むように、円い陣を書き、中に色々な術式を加えていく。

そして………

「やっぱめんどい、止めちゃう。」

「そんな簡単に!?!」

アスクレピオスは魔法陣こそ書き終えたものの、生命力の供給を止めるのと言いだした。

「何でやめんだ馬鹿!」

「だって疲れるんだよ。」

疲れるって………

呆れ顔の俺を見て、少し慌てるアスクレピオス。

「い、いや、もっと疲れにくい方法があるんだって。」

「どんな?」

「治癒って知ってる？」

「チュ？ああ、アレだろ？うん、アレだよな」

「はあ。」

「え、ちよ、そういうの良くないよ！！」

「治癒って言うのは傷を完璧に治すことなんだけど、完治ともいうんだ。まあそれだけじゃ生命力の供給にはならないんだけど、治癒は直接の再生より疲れにくいし、魔法陣と蛇杖を併用していて効果が増幅するから、軽く早く傷を治すことが出来るんだ。」

「じゃあやれ。」

と、俺が言った途端に、ミカエルを包んだ青白い発光、そして紫色の電流が辺りを大きく抉った。

「来たよ……ゼウス、俺を守れ！！」

「って、ええ？」

ミカエルから出る電撃は収まる事を知らず、どんどん大きく拡大していく。

ミカエルの前に手を広げて立ち、放出される電撃をただただ受け止める事しか出来ない俺。

全く効かないけど。

その後ろにアスクレピオスが魔方陣に杖をついていて、眼を閉じながら集中力を高めている。

轟々と唸り声のような音と、空気中を無理矢理に電流が通り、耳を塞ぎたくなるような爆音が辺りに轟いた。

「あああああ！！があっあああああああ！！」

ミカエルの奇声。

それもそのはず、眼から、口から、鼻から、耳から、紫電が踊り、体の至る毛穴からマグネシウムを加熱しているよりも強烈な光が、雲で薄暗い辺りを青白く染め上げた。

アスクレピオスは、ひたすらにミカエルを治癒する。

電撃に対して痛くも痒くも無い俺は、ミカエルの姿を凝視していた。

何ともまあ……………

グロくなったり、普通になったり、グロくなったり……………

想像を超える激しい痛みを感じていると思われるミカエルは、痛みを味わったにも関わらず、治癒されて痛みを継続的に受けなければいけない。

普通は一瞬で死ぬのに、一瞬より速く治癒されるとは。

「アスクレピオス君……………君は、鬼畜だ。」



どれ位経ったのだろう。

焼肉の肉を焼くような音と赤黒い蒸気が、ミカエルの全身から発せられる。

暴れ狂う紫電はいつの間にか鎮まっていた。

ミカエルはピクリとも動かない。

舌は神経が通っていないかのようになり出ていて、眼は白目を向いている。

「え………これ、死んでんの？」

アスクレピオスの肩を掴み、大きく揺さ振るが反応は無い。

「みい　いい　いい　かあ　ああ　ああ　ああ　ええ　ええ　ええ　るう　うう　うう
うう　うう　うう　うう　!!!」

俺はそう叫びながらアスクレピオスに寄り掛かった。

「って何故俺を揺らす。」

「そんな事より、ミカエルはどうなんだ!!」

「電気で逆立った髪の毛はいつもの髪にちゃんとしたし、体中に火傷や切り傷に似た皮膚に出来た傷、グチャグチャに掻き回された内臓や肉が、何事も無かったように元に戻ってる。それに、さすがに大天使はすごいな。治癒しながら生命力も回復してるし。楽でいい」

「み、ミカエルすご…ごほん、ごほん。具体的な解説、ありがとう。で、ミカエルの今の状態はどうなの、ピクリとも動かないけど……」

アスクレピオスは、少し俯き、大きく息を吐いた。

「それが………気絶しているだけだ。」

「じゃあ深刻そうに言うなよ!!」

しかし、あのミカエルがまさかこんなことになるとは………

今なら、やりたかった事が出来そうだ。

「アスクレピオスって、マジックペンとか持ってる?」

「いや………」

「じゃあちよっと待ってて。」

俺が思念によって移動したのは、四大天使の住む所、セラフィメウス。

俺は、視界に入った扉を無造作に開けた。

すると、扉は完全には開かず、途中で急に止まり、それと同時に大きな鈍い音が聞こえた。

中に入ると、扉の前でガブリエルが額を指先で押さえていた。

「はうう………」

「扉にぶつかってしまった様だが、大丈夫か？」

「全然大丈夫じゃないですよお、もう。痛いじゃないですか。何しに来たんですか？」

ガブリエルがむすっとしている。

「マジックペンを借りにきたんだ。」

と言いながら辺りを見回すと、見た事のない天使が部屋の隅に立っていた。

そいつに話し掛けようと思っていると、何故か扉は部屋の外へ、吹き飛ばされるように飛んでいった。

代わりに、そこにはラファエルが立っていた。

「この扉がいけないんだ。扉を変える。」

扉ぶっ壊したー！！

確かに扉が部屋側に開くのは奇怪だけど、設計した奴が悪いだろ、扉は悪くない。

「つかラファエル、扉どうすんだ……………」

「ウリエルがいます。」

「ウリエル？」

ウリエルって、隅っこにいる……………あれ？

第7話◆全て単簡変様。

俺の頭がどうかしていなければ、ウリエルはさっきまで部屋の隅に居たはずなのだが……

いつの間にか倒れた扉のすぐ側に。

「扉、作る」

ウリエルはボソツと呟いて、手を体の前へ出し、中指をしなるように動かすと、見捨てられた白い立派な扉が、ボコボコと沸騰しているかのような動きを見せ、塵となり、ウリエルの手に集まってゆく。

そしてその集まりが構成したのは、親指の爪と人差し指の爪の面積の和と小指の長さの積から表される値を立方体にしたような小さな物。

それを、熾使住処内部と外の間の、セラファイメウス扉が設置されていた場所に捨てるように投げると、さっきとはデザインが違う立派な扉が完成した。

「おお………」

思わず口から漏れる感嘆の言葉。

俺はわざとらしく咳でごまかしている間に、ラファエルが風で扉についた細かい塵を除去すると、扉の光沢は急激に鋭く輝く。

「扉、完成だね」

ガブリエルがミルクティーを造りながら嬉しそうに呟くと、ウリエルが少し恥ずかしそうに微笑んだ。

まさか、こいつら……………ッ!!

そんなわけ無いか。無い事を何故か願う。

そんな事より、マジックマジック。

と、後ろをやけに勢いよく振り返ってみると、何をしようと思っていたのかは知らないが、ガブリエルが顔の位置にマジックを構えていた。

御想像の通り、マジックは俺の顔に突き刺さる。

「ぐへ痛い!ど、どうしたっ!」

「ひいゃーん♪」

ガブリエルは素早い動きで縦長い大きなテーブルの向こう側に逃げると、凄く可愛い顔でにやりと笑った。

「さっきのお返しです!」

ガブリエルは誇らしげに叫んで、マジックを投げってくる。

結構速いぞ、って二本同時じゃねーか!!

良い音を出しながらカッコつけて掴むと、思念を開始。

マジック、取れてよかった……取れなかったらこの上なくダサイよな……

そして、眼を開けると、進行形で大の字に寝ているだらし無い格好のミカエル。

「おい、ミカエル君？」

返事がない。

ただの屍のようだ。

隼哉にんげんの悪魔っぷり、すなわち黒きスピリットが久方ぶりに開眼する。

「うへ。うへへのへ」

邪気並々な笑顔と共に、2本のマジックの細い方のキャップを取ると、俺の両手が乱舞した。

「ひゃっはあああああああつ!!」

そして10分後。

「くだらない事をするなあー、君。」

「ほ、ホントの事言うな!」

「人間って全部そうなの?」

「ああ、まあ……って、え!？」

アスクレピオスからの、予測不能の一言。

「ちょちよつちよちよい!!!! え、ちよつと待ってね……」

「隠さなくてもいいよ。その方が……やりやすいし。」

アスクレピオスは、少し寂しそうな顔をして言った。

「ゼウスは、俺を撃ち壊そうと……天へ人間の頃の記憶を消して……蛇使いの前座を殺して……うう……」

「ど、どうした? 何言ってっかわかんねーよ。」

「な、なんでもないよ。てか少し位ゼウスに成り切ろうよ。ゼウスの時と態度とか全然違うし、喋り方が変。」

「ふーん。」

まあいいや。と、ふとミカエルを見ると、僅かではあるが意識が戻ってきたらしく、掠れた声で話し掛けてきた。

「な、なんだがこの上なく屈辱で劣悪な夢を見た気がしたのだが……」

「き、気のせいなんだぜ! とりゃあ!」

バシッと頬を叩くと、ミカエルの身体はビンタの衝撃に持って行か

れ、そのまま背骨を軸にスパイラル回転しながら地面を刳り進んだ。
やべ。

「えっと、とりあえずアスクレピオス、マジックとか消し「断る。
俺のアドバイスを納得の2文字で終わらせた罪は大きいよ。」

そんなあ。

退路が………絶たれた。

第8話◆蟹喰う悪魔。

とある森の奥……………

ある旅人が、森に迷い、苦悩の末見つけ出した小屋へ行くまでの話
……………

太陽がまだ、ぎこちなく輝く朝方の、霧が掛かった森。

動物達はまだ眠たい眼を擦っているような時間。

ある一人の男が、やや太い木の棒を杖に、森の中を彷徨っていた。

「だぁーっ、くっそぉー……………何処だよここ……………」

疲れ果て、だらしない格好をしていて、こんな森の奥なのに何故か手ぶらの男。

朝だと思って起きたら、全然知らない森の中で、適当に歩いていれば何れはどっかに出られるという甘い考えを持って歩いていたら、

現実の厳しさを体感した残念な典型的なアマちゃん思考の男。

茶色い衣を着て、大きめのフードを被って明らかに怪しい格好をした男。

ここには人の気配は無いので誰にも何とも言われないが、街中でこんな格好だったら、まず不審な眼差しを向けられるような格好をした男。

腹からは獣の唸り声のような音が遠くまで響いていた。

それに呼応するように、大型の熊が姿を現す。

グルルルル……

ぐうううう

グルルルルル……

ぐうううううう

熊の唸り声と腹の唸り声。

男は、「もーやだ。」と言わんばかりのふて腐れた態度を示した後、敵意満載の、冬眠覚めから間も無い若く逞しい熊が、両手の爪を光らせて、男に襲い掛かった。

だが、何故だか男の3m以内に入ると不意に攻撃を止め、熊は憂鬱そうに森の奥へ帰っていった。

「つたく……あー、蟹食いてえ！つうか眠りたい！！！」

最早三次元形態に膨れ上がった隈。

唇と眼の下が紫色に変色し、明らか具合が悪そうな男は、とにかく眠れる場所だけを探していた。

それから、色々あった。

サルにちよっかいを出されたり、突然雨が降ったり、何かの糞をジャストで踏みつけたり、何故だか穴に落ちたり、欠伸をしていたら飛んできた蚊が口の中に入って変な食感を味わったり……

だが、そこにチャンスが訪れる。

「か、蟹のニオイだ！！！」

何かさつきから何となく蟹の香りがしてたんだよなあ、とは思っていたが、眠さによる幻だと思っていた。ついに寝不足は嗅覚までもジャックしたか。そう思っていた。

実は、前に変な男の行進が見えていた。そして変な怖い女の声が聞こえていた。

網膜内で構成された景色だが。鼓膜が勝手に構成した声だが。

幻覚なんてことはわかってる。でも少しくらいはいい思いをさせておくれ……と思いつながら大好物の蟹の香りを嗅いでいた。

「お前の鼻は犯されていないぞ。蟹の匂いは本物だぞ。」

そんな声が聞こえていた。

無論、誰にも聞こえない脳内で処理された声だが。

そして朧げな感覚のまま、匂いを追っていった。

するとどうだ。

あつたのだ。

小屋が。

蟹が!!!!!!

まるで久し振りに天国に来たようだった。

切り替わって、鮮明にシフトチェンジされた景色、意識。

ドアノブを掴み、思いっきり引いた。

「蟹~~~~~」

そこにいたのは天使。

5人の天使。

それもこれまで見た事ないような怒った顔で。

それもこれまで見た事ないような憂鬱そうな顔で。

それもこれまで見た事ないような物欲しがりな顔で。

それもこれまで見た事ないような嫌らしい顔で。

それもこれまで見た事ないような面倒そうな顔で。

それらが取った行動は、統一されていた。

天使は必ず持っている槍。

それを、天使のつかえる属性、火や水を纏わせて、同時に男に撃った。

ゴバーンと、面白い音と共に、水を蒸発させる音や水を凍らせる音が入り混じった変な音が鳴って、蒸気のカーテンで見えなくなった景色の先に、きっと粉々になった男が……と、思わせるような状況の中。

男は立っていた。

無傷だった。

途端。

天使たちの込めるパワーが変わった。

天使は口々に叫ぶ。

「「貴様………さては悪魔だな！！？？」」

「なんでわかったの？　つうか蟹食わせて。」

再び面白い爆音が響いた。

第9話◆体力があるから何だ。

ある晴れた空の下。

病み上がりにも関わらず

元人間にぶん殴られて、高速で12m程吹っ飛び転がり、再び意識を失っていた炎天使は意識を取り戻した。

「うっ……よく覚えていないが、劣悪かつ屈辱的な夢を見た後、一番むかつく男にモロぶん殴られた嫌過ぎる夢を見た気がしたのだ………」

鉄のベッドに横たわるミカエル。

マジックはすでに消えていた。

隼哉が頑張って消した。

大変だった。

太陽光で熱くなっている鉄のベッド。太陽を司る太陽神ヘリオスの能力の一端である太陽光は、炎とは別の神聖さを持ち、生命に安寧を与え、暗き闇を打ち消す力を持つ。

神聖な太陽光の熱は大天使にとっては大きな力。

だが、ヘリオスの力に劣るが神格化できるほどの力を持つアポロン

も太陽神であり、最近風邪気味のヘリオスの代わりに太陽を統べてるらしい。

オリュンポス十二神であるアポロンと、そうでないが強大な力を持つヘリオス。どっちが太陽神と決めるかはゼウスにかかっているらしいが……

そんな事より、ミカエルが覚醒した瞬間、隼哉がそそくさしながらミカエルの寝るベットに近付く。

「おおお起きた？」

「ああ……………」

「大丈夫か、大丈夫か？」

「ああ……………」

ミカエルが単調な返事をしているのに対し、隼哉は不気味な笑顔を浮かべる。

「そうかそうか、うへ、うへへへー。」

「キモいわ！！誰、誰の真似なの！？」

この2人が織り成すコント。

アスクレピオスは微笑んでいた。

「馬鹿だな、こいつら……………あ！そんなことより。」

アスクレピオスは思い出したように言った。

森の奥に、まだ一仕事残っている、と。

思念と固定型を駆使して、森の奥に到着した二人の神。

一人だけ走る天使。

そして、到着した場所には先程アスクレピオスがいた、倒れた天使と大量の血で塗れた小屋。

「天使の読心と残留思念の読解をお願いしたい。」

アスクレピオスの頼みに、ミカエルが威張りながら胸を叩いて、頷く。

「容易です!!」



何ともグロテスクな場所に戻ってきた俺達。

アスクレピオスの頼み事に対して、自分しか出来ない事だと悟り、
威張るミカエル。

うぜ。

いや、そんな邪念はどうでもいい、何故奴がこんなにも長い距離を走って息切れ一つしないか、という事だ。

もしや………天界の者共は、体力という概念が存在しないのか？

そしたら最強じゃん！！

誰かに聞こうと思ったが、残留思念を読み取る準備をしているミカエルに聞くのはミカエルの仕事の邪魔になるので、俺はミカエルに聞く事にした。

「つて何でだよ!! アスクレピオス様に聞けよ! わざと聞いたって対応しないから!」

「また勝手に心を読みやがって。もう俺の質問が分かっちゃったんだから答えてよ。」

ミカエルは一息着いた後、鼻で笑うように言った。

「走ってみなよ。」

[illegible]

だが一理ある。

冷静に納得した俺は、小屋の壁際を走りだした。

足音と同時に、水の撥ねる音が耳に入る。

水と言っても、薄赤くて血生臭い水だ。

小屋の壁際を5周程走った俺は、少々息が苦しくなってきたのに気付いた。

体力にも限りがあると言うのか……………!!

「その通り。」

真面目な喋り方でミカエルが言い放つ。

その言葉は、無惨にも俺の希望を打ち崩し、落胆へと導いた。

「ぼへみうああああああああん!!!!」

「……………え?何その反応。そんなに悲しかったの?ボヘミ……………何?」

「黙れミカエル!!つか何でお前そんな走れんのおお!?」

「体力ありますから。」

「体力があるからって……………何だってんだ畜生がああああ!!」

俺は走りだした。



体力無いんだ……

あいつは小屋の外に向かって走って行った。

……って今から体力つける気かよ!!

まあ俺の体力には到底追いつけないはず。

だが不可解な点が1つある。

何故、神の身体なのにあんなに体力が無いのだろうか。

意識と身体が適合してないのか？

魂の質が違うからな。

でももし適合したらどうなるんだ。

……十中八九恐ろしい事になる。

あー、嫌だー。

そんな雑念の中、残留思念の解析が終了したが、得られた情報は、この場にいた5人の天使が誰か、という事だけだった。

だが、天使の名前が分かっただけでも十分だ。

後はその天使から聞き出すだけなのだから。

「アスクレピオス様、私は天使達から情報を聞き出していきます。」

「うん。」



荒い走法、荒い呼吸。

森の土を踏み鳴らす音が、身体に圧迫感を与える。

視界が狭まり、前方以外は霞んだ景色、または景色が見えない。

振るう腕は重く、邪魔だとさえ思ってしまう。

下半身も大分疲労しており、脚を動かすのが精一杯だ。

………一体どれくらい走っただろう。

体力的にも精神的にも限界だ。

無意識に足を動かしていると、何でもない小石に躓き、倒れそうになる。

抵抗する力は無かったし、抵抗しようとも思わなかった。

鼻が砂に触れたかと思うと、顔面が地面に叩き付けられ、衝撃が痛みとなって顔全体に伝わる。

だが、その痛みすら感じない位に意識は不安定で、何の反応も無く倒れたままだった。

身体に力が入らないとは、まさにこの事か。

起き上がれない、なんてもものじゃない。

指先を動かす事すら難しく、呼吸を行えば肺が燃えるように痛い。

やはり、元引き籠りにランニングは向いてない。

………何をやっているんだ、俺は。

何でこんなにあいつに對抗心を持っているんだ。



俺は真っ白いビルの8階の扉を叩く。

出てきたのは、能天使^{エクスシア}を率いる天使、カマエル。

「ミカエルか……何のようだ。」

「この前の悪魔との戦闘について、少し話がしたい。」

カマエルは面倒そうに、俺を部屋に入れた。

この時はまだ知る由も無かった。

悪魔とカマエル達の一戦が、後々に大厄を招く事など……………

第10話◆読心術濫用。

カマエルは、部屋の奥にある二対の椅子へと俺を誘った。

「腰をかける。」

俺は、その純白で柔らかい椅子に腰をかけると、読心術の準備に入った。

「さて、何から話そうか。」

カマエルがそう言うと、ピリツとした奇妙な空気が場に流れ、部屋を静寂が支配していった。

それから、幾分経っただろう。

カマエルがゆっくりと話し出すと同時に、人間達の言う、動作や表情などで考えている事や、心を読むような読心術に加え、魔力による術式を展開させた上での、心中を掌握する読心術を始める。

全天使階級の中でも、一位のその実力。

「今から1日前の話だ……………」

なんか衝動的に果実が食べたくなってきた。

いくら自分の家といえども、これは流石にきつい。

果実を食べれば、暑さが緩和できるのかという話になれば、それはちょっと……ってことになるけど、とにかく暑すぎる。

喉がカラカラだ。

喉を癒そうかな。

いや、こんな事に力を使っては駄目だ。

とりあえず外に出よう。

部屋を出て、近くの森へと足を運ぶ。

しかし、森の木々を見渡しても、果実なんで何処にも実っていない。

あーあ、一人ってやっぱ寂しい。

「果実食べたい」

果実を求めて辺りを彷徨っていると、全く求めているものに出くわした。

「確か……隼哉だっけ？どうしたの。」

「走ったら、疲れた。立てない死ぬ。」

「ここ俺ん家から徒歩5分。」

「あっそどーでもいい死ぬ助けて……………」

仕方ない、と伸ばされた手をとる。

しかし、手を引いても中々立ち上がらせる事ができない。

「ふっ……………んぐうう……………はあっ。駄目だ、何でだろう。」

「背がちっちゃいからじゃない？つかもう自分で立てる。」

立たれた。

何か悔しい。

隼哉はゆつくりと立ち上がると、欠伸をしたあと頭を左手で掻き、目を擦りながら俺に質問をした。

「ミカエルはどうなの。」

「いや、どうなのって、何なの。」

「アスクレピオスなら知ってるかなー、って。」

「いや知らないよ！逆に何で知ってんの俺。」

「いや知らないよ。」

人間めんどくさっ。

でもゼウスよりはましか。

「とりあえず俺ん家でミカエルを待とうよ。」

「えー」



「そして、その時、悪魔の一撃が俺を襲い……………」

雑念を取り払い、カマエルの読心をし続けていた。

しかし、相槌すら打たずに集中している俺に対して、カマエルは何度も不信感を抱くのだ。

「……………ねえ、聞いてる？」

心配そうな呼び掛けに、反応を示さない俺。

「集中してんの？」

いいから話せ。

「集中してたら右手挙げて。」

集中してたら挙げられないだろ。

「……………」

「もういいよ。読心終わったし。」

「え。」

俺は素早く立ち上がると、そそくさと玄関へ向かう。

そして、話し掛けられる前に外へ出た。

「引き出した情報を伝えなければ……………」



俺達があっち向いてほいで真剣に勝負をしていると、俺がジャンケンに負けた瞬間、突然扉が開く音が聞こえたので反射的にその方向に顔を向けると、ミカエルと、力が籠り硬直した指と、勝ち誇ったアスクレピオスの顔が、視界に鮮明に映った。

「くっ……………負けたか。」

「やったーやったー！」

俺達の反応に戸惑うミカエル。

「え……………何。何なの。俺が何かしたの？」

「ミカエルの所為で負けたんだよ。ふざけんなよ全く。代わりにお前が罰ゲームやれよ。」

「罰ゲーム？」

アスクレピオスがにやにやしている。

「ふはははは！！！！この日をどれほど待ち侘びたか！！！！今日からお前は俺の忠実なる下部だあ、ゼウスウウウウ！！！！……………本物じゃないんだけど。まあいっか。」

ミカエルは開いた口が塞がらなかった。

俺は膝を落とし、拳を床に叩きつける。

「ミカエルさえ……………ミカエルさえ来なければ……………くうっ！！」

俺は再度、拳を地面に叩きつける。

慌てふためくミカエルだが、読心術で状況を理解する。

「…………ふむふむ……………成る程。くだらね。お前ら馬鹿だろ。それより情報集めたから聞け。」

俺は馬鹿なのでそれほど抵抗は無かったが、アスクレピオスは哑然としていた。

「え…………今、お前らって言わなかった？さりげなく俺も入れたよね。神なのに。ねえ…………俺の空耳なのかなあ？」

ミカエルは真面目な顔のまま、近くの椅子に座った。

よく見ると、少し苛立った表情をしている。

「じゃあ、収集した情報を言うからな。よく聞けよ。」

ミカエルは話し始める。



とある部屋。

コンクリートに近い物質でできているタイルに包まれた空間。

そこには、槍を持つ5人の天使がいた。

その中でも一際大きい槍を手にする天使が、槍の先を地面に突き刺し、叫ぶように言い放った。

「覚悟はできたか!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7907r/>

神様、始めました。

2011年10月7日08時17分発行